

「熊本県立大学・三江学院日中国際日本語研究フォーラム」報告

熊本県立大学における国際化推進の一環として、本学の日本語研究の成果を広く発信し、とくに日本語教育の盛んな中国の日本語研究者との研究交流を促進すべく、文学部主催の熊本県立大学・三江学院日中国際日本語研究フォーラムを、熊本とは孫文と宮崎滔天との交流で縁のある南京市の三江学院において平成24年8月21日に開催した。

三江学院は中国最初の私立大学の一つで、学生数は約1万8千人。本学からは半藤英明副学長、および院生と、ともに修了生である宮崎公立大学非常勤講師の田中利砂子氏、熊本市立京陵中学校教諭の西村るり氏が参加した。

はじめに中国側を代表して陳云棠副学長が挨拶し、つづいて半藤副学長が「日本語の基幹的な構文」、三江学院の掲侠日本語学部長が「日中両国語の修辭的特徴とその文化的内包」と題して基調講演を行った。

そのあと午前・午後と2会場で日中の研究者・院生11名の研究発表があり、三江学院日本語学部の中国人学生約30名が聴講した。基調講演と研究発表の題目は、以下の通りである。

基調講演1 半藤英明：日本語の基幹的な構文—「は」と「が」の機能—

基調講演2 掲 侠：日中両国語の修辭的特徴とその文化的内包

(A会場)

佐澤有紀：提題のツテが担う範囲と特性

王 慧君：自然環境に育まれた日本語

呉 昌萍：オノマトペの翻訳と母語干渉

費 雪炎：「のだ」について

戴 蓓：ヒアリング授業における否定疑問文の指導

(B会場)

佐藤友哉：「を」と「に」の対象性

石 海英：「ものの」と「ものを」の使い分けについて

夏 秋：中日ことわざにおける比喩法の比較

田中利砂子：現代語の「こそ」構文とモダリティ

王 焯婷：「踊りを踊る」から「名詞＋を＋自動詞」についての一考察—中国語話者の日本語学習者を中心として—

西村るり：教科書における漱石作品—中学校国語教科書から—



フォーラムの様子



三江学院

日中の4人が登壇した締めくくりの総括シンポジウムでは、中国人教員から「日本の文法研究の成果は中国の日本語教育でも役立つ」「母語話者の日本語研究は大いに参考になる」「先行研究をふまえて用例を収集して丹念に分析する方法論が参考になった」などの意見があり、日中両国の研究交流の意義と重要性が確認された。

帰国後、今回のフォーラム開催にご尽力賜った掲侠日本語学部長から「日本語研究フォーラムがスムーズに行われたことはとても嬉しいことでした。これからも交流を続けていければ、幸いなことと思います」とのメッセージが届いた。

本学として、文学部として、研究成果の世界への発信と研究レベルの質的向上を目指し、国際レベルの研究交流を益々盛んにしていく必要性を感じている。

(文責：半藤英明)